

## まとめ

- 1 成果
- 2 課題



《バッチコーイ》



川井 亮太郎 《マンション》

## 1 成果

- 1年生全員のひらがなの読みに関する実態把握を実施したことで、普段の授業では読めているように捉えられる児童の中にも困難を抱えている児童がいることが分かり、適切な指導を行うことができた。
- アプリケーションを使った個別指導は、児童の学習意欲が高く、楽しみながら取り組めるため、継続した指導が可能である。また、1日1回5分間という短い時間で手軽に指導が行えることで、担任にとっても一対一の指導時間が無理なく継続して確保できた。
- 読みの苦手さが改善されることで、授業への参加意欲が高まったり、積極的に発言することが増えたりするなど、授業に集中できるようになった。
- 読みの苦手さが改善されることで、音読だけでなく、学習全般に対して自信が持てるようになり、自己肯定感が高まった。
- 客観的な指標による実態把握を実施することで、児童の課題について保護者と共通理解を深めることができ、実態に応じた支援について検討を始めるきっかけとなった。
- アプリケーションを使った学校での個別指導に加え、自宅でも同様にアプリケーションを使って学習を行った児童は、より高い指導効果を得ることができた。

## 2 課題

- △ 通常の学級の中で、実態に応じた個別指導を行うためには、学習指導案の中に個別指導を組み込み、計画的に実施する必要がある。
- △ 個別指導を実施した児童には、アプリケーションを使用した個別指導が終了した後も、継続した支援が必要であるので、個別指導計画により、指導の内容・方法を引き継いでいく必要がある。
- △ 読み書き障害の児童の中で、本アプリケーションでの個別指導を実施しても期待するような成果が得られにくい場合がある。そのような児童には、通常の学級での個別指導だけでなく、さらに実態に応じた個別的な指導が必要と考えられるため、特別支援教室の利用等を検討する必要がある。